

## 球関数の新谷 lifting について

阪大・理 川中宣明 (Noriaki Kawanaka)

### §1. 新谷 lifting

$G$  を有限群,

$$\sigma: g \longrightarrow \sigma g, \quad g \in G$$

を,  $G$  の自己同型とする.  $G$  の  $\sigma$  による不動点の全体を  $G_\sigma$ ,  $G$  と  $\langle \sigma \rangle$  の半直積  $G \langle \sigma \rangle$  を  $\tilde{G}$  と書く.  $m$  を  $\sigma$  の位数として, "ソル  $G$  写像"

$$N: G \longrightarrow G$$

を

$$N(g) = (g\sigma)^m = g \cdot \sigma g \cdot \sigma^2 g \cdot \dots \cdot \sigma^{m-1} g, \quad g \in G$$

によって定義する.  $G$  が可換なら  $N(g) \in G_\sigma$  となるが一般には,  $N(g)$  を含む  $G$  の共役類  $G_{N(g)}$  が  $\sigma$  で保たれり, という程度のことが成り立たない. 次の条件 (S) を考える.

条件 (S) 任意の  $g \in G$  に対して  $G_{N(g)} \cap G_\sigma$  は  $G_\sigma$  のひとつの共役類である.

さて,  $R: G \longrightarrow GL(W)$  を  $G$  の複素既約表現とすると, " $R = R \circ \sigma^{-1}$ " も  $G$  の既約表現である. いま " $R \sim R$ " と仮定すれば,  $\tilde{G}$  の既約表現

$$\tilde{R}: \tilde{G} \longrightarrow GL(W)$$

で  $\tilde{R}|_G = R$  であるものが (同値を除いて  $m$  個) 存在する. 条件(S)のもとで, 次のように定義する.

定義 (新谷)  $G_0$  の既約表現  $Q: G_0 \longrightarrow GL(V)$

が,  $G$  の既約表現  $R$  で " $R \sim R$ " となるものに,

"持ち上がる" とは,

$$\text{trace } \tilde{R}(g_0) = \varepsilon \text{ trace } Q(n(g))$$

がすべての  $g \in G$  に対して成立することである.

ここに  $\varepsilon$  は  $\varepsilon^m = 1$  を満たす複素数で  $g$  には

関係しない, また  $n(g)$  は  $G_{\mathbb{N}(g)} \cap G_0$  の

任意の元である.

条件(S)が満たされ,  $G_0$  の任意の既約表現が,  $G$  の既約表現へ持ち上がる場合として, 例えば, 次の2つが知られている.

Case (G)  $(|G|, m) = 1$  の場合.

(1968 G. Glauberman [1] の結果. Glauberman

自身の formulation は, 上と少(だけ異なる。)

Case(S)  $G = GL_n(\mathbb{F}_q^m)$  ( $\mathbb{F}_q =$  元数  $q$  の有限体),  
 $\langle \sigma \rangle = Gal(\mathbb{F}_q^m/\mathbb{F}_q)$  の場合.

(新谷卓郎 1976.<sup>[2]</sup> 土井, 長沼両氏による保型形式,  
 および対応する Dirichlet 級数の持ち上げについての  
 結果を発展させた斎藤裕氏の仕事[5]の本質を, 新  
 谷氏は, 局所体・アデール環上の reductive 群の表  
 現の持ち上げという形で定式化した[3], [4]。上記  
 1976年の論文は, 有限体上でも同様のことが成立  
 することを示したもの。)

良く知られているように, 対称空間上の球関数, あるいは,  
 Hecke 環の指標は, 群の既約指標の概念の一般化  
 と考えることができる。そこで, “球関数の新谷  
 lifting” とは何か? という問題を考えてみたい。

## §2. Hecke 環 $H(H \backslash G / K)$

有限群の Hecke 環とその表現の一般論については,  
 Curtis, Reiner の本[6]の巻1巻, §11D があるが,  
 ここでは, その結果を, もう少し一般化しておく。

$G$  を有限群,  $H$  と  $K$  をその部分群とする。  $G$  の群環

$\mathbb{C}G$  のべき等元  $e_H = |H|^{-1} \sum_{h \in H} h$ ,  $e_K = |K|^{-1} \sum_{k \in K} k$  を用いて

$$\mathcal{N}(H \backslash G / K) = e_H \mathbb{C}G e_K \quad (\subset \mathbb{C}G)$$

とおく。明きさかに  $\mathcal{N}(H \backslash G / K)$  は,  $\mathbb{C}G$  の部分環である。Curtis-Reiner の本の Hecke 環は  $H=K$  の特別の場合である。 $\mathcal{N}(H \backslash G / K)$  は, また, 左から  $\mathcal{N}(H \backslash G / H)$  が, 右から  $\mathcal{N}(K \backslash G / K)$  が作用する加群とみることができる。“Hecke 環”  $\mathcal{N}(H \backslash G / K)$  およびその表現の一般論について, 次のことがわかる。

1°  $\mathcal{N}(H \backslash G / K)$  は, 半単純とは限らない。また, 単位元を持つとは限らない。

2°  $\{x_i \mid i \in I\}$  を  $H \backslash G / K$  の完全代表系とすると,

$$[x_i] = \frac{|HK|}{|x_i^{-1} H x_i \cap K|} e_H x_i e_K, \quad i \in I$$

は,  $\mathcal{N}(H \backslash G / K)$  の基底をなし, その構造定数  $\in \mathbb{Z}$  となる。

3°  $\mathcal{N}(H \backslash G / K)$  のすべての既約指標は,  $\mathbb{C}G$  の既約指標の  $\mathcal{N}(H \backslash G / K)$  への制限として得られる。また,

$\mathbb{C}G$  の相異なる既約指標  $\chi_1, \chi_2$  に対して,

$$\chi_i | \mathcal{N}(H \backslash G / K) \neq 0, i=1,2 \Rightarrow \chi_1 | \mathcal{N}(H \backslash G / K) \neq \chi_2 | \mathcal{N}(H \backslash G / K)$$

4°  $\mathbb{C}G$  の既約指標  $\chi, \chi'$  に対して

$$\begin{aligned} \chi(\chi) |G|^{-1} \sum_{i \in I} |Hx_i:K| \chi(e_H x_i e_K) \overline{\chi'(e_H x_i e_K)} \\ = \begin{cases} 0 & \chi \neq \chi' \\ \chi(e_H e_K) & \chi = \chi' \end{cases} \end{aligned}$$

5°  $\mathcal{N}(H \setminus G / K)$  が半単純 ( $\Leftrightarrow$  べき零な両側イデアルは0)

かつ可換となるための必要十分条件は,

$\langle \chi, 1_H^G \rangle \neq 0$ ,  $\langle \chi, 1_K^G \rangle \neq 0$  とする  $G$  の 任意の 既約指標  $\chi$  に対し,  $\langle \chi, 1_H^G \rangle = \langle \chi, 1_K^G \rangle = 1$  と  $\chi(e_H e_K) \neq 0$  が成り立つことである.

定義  $\mathcal{N}(H \setminus G / K)$  の元  $\varphi \neq 0$  が  $H \setminus G / K$  上の球関数であるとは,

任意の  $f \in \mathcal{N}(H \setminus G / H)$  と任意の  $g \in \mathcal{N}(K \setminus G / K)$  に対して

$$f \cdot \varphi = c_\varphi(f) \varphi \quad \exists c_\varphi(f) \in \mathbb{C}$$

$$\varphi \cdot g^* = d_\varphi(g) \varphi \quad \exists d_\varphi(g) \in \mathbb{C}$$

であること. ここに,  $*$  は  $\mathcal{N}(K \setminus G / K)$  の標準的な反自己同型である.

このとき  $f \rightarrow c_\varphi(f)$ ,  $g \rightarrow d_\varphi(g)$  は, それぞれ  $\mathcal{N}(H \setminus G / H)$ ,  $\mathcal{N}(K \setminus G / K)$  の1次元表現となる.

とくに  $\mathcal{N}(H \setminus G / K)$  が半単純, 可換である場合,  $G$  の既約指標  $\chi$  で,  $\chi(e_H e_K) \neq 0$  を満たすものに対して,

$$\varphi_\chi = \sum_{i \in I} |Hx_i:K| \overline{\chi(e_H x_i e_K)} e_H x_i e_K$$

は  $H \backslash G / K$  上の球関数である。逆に,  $H \backslash G / K$  上のすべての球関数は  $\varphi_x$  の定数倍で,  $\mathcal{N}(H \backslash G / K)$  は,  $\varphi_x$  達で張られる。

$$\begin{aligned} \text{また,} \quad c_{\varphi_x}(e_H \times e_H) &= \chi(e_H \times e_H) \\ d_{\varphi_x}(e_K \times e_K) &= \overline{\chi(e_K \times e_K)} \end{aligned}, \quad x \in G$$

である。

§3  $\mathcal{N}(\Delta G \backslash G \times G / \Delta_\sigma G)$  について

$G$  を有限群とし,  $\sigma$  をその自己同型とする。直積群  $G \times G$  の部分群として, 次の2つを考える。

$$\Delta G = \{(x, x) \mid x \in G\} : \text{対角部分群}$$

$$\Delta_\sigma G = \{(\sigma x, x) \mid x \in G\} : \sigma \text{ でひねった対角部分群}$$

このとき,  $\mathcal{N}(\Delta G \backslash G \times G / \Delta_\sigma G)$  は, 可換。一般には半単純とは限らないが, 例えは, §1 の  $\text{Case}(G)$ ,  $\text{Case}(S)$  の場合は半単純である。 $G \times G$  の既約指標  $\psi$  が,

$$\langle 1_{\Delta_\sigma G}^{G \times G}, \psi \rangle \neq 0, \quad \langle 1_{\Delta G}^{G \times G}, \psi \rangle \neq 0$$

となるための必要十分条件は, せいか

$$\psi = \chi \otimes \bar{\chi}, \quad \chi \text{ は } \sigma \chi = \chi \text{ をみたす } G \text{ の既約指標}$$

と書けることである。また, このとき

$$(\chi \otimes \bar{\chi})(e_{\Delta G}(g, 1) e_{\Delta_\sigma G}) = \frac{\tilde{\chi}(\sigma^{-1}) \tilde{\chi}(g\sigma)}{\chi(1)^2}$$

が成り立つ。ただし、 $\tilde{\chi}$  は  $\{1\}$  の  $\tilde{R}$  の指標である。  $\sigma = \text{id.}$  のときは、良く知られた式

$$(\chi \otimes \tilde{\chi})(e_{\Delta G}(g, 1) e_{\Delta G}) = \frac{\chi(g)}{\chi(1)}$$

になる。これらの式と Glauberman 1968, 新谷 1976 の結果をあわせると、Case (G), Case (S) の場合は、

$$\Delta(G_0) \backslash G_0 \times G_0 / \Delta(G_0) \text{ 上の球関数}$$

と

$$\Delta G \backslash G \times G / \Delta G \text{ 上の球関数}$$

とが、ノルム写像による対応を通して同一視できることがわかる。これは、Glauberman や新谷の結果の球関数的な言い換えである。次節で単なる言い換えでないような例を示す。

§4  $\mathcal{N}(Sp_{2n}(\mathbb{F}_q) \backslash GL_{2n}(\mathbb{F}_q) / U_{2n}(\mathbb{F}_q))$  など

$G$  を有限群、 $j$  と  $\tau$  をその自己同型で

$$j^2 = \tau^2 = \text{id.} \quad j\tau = \tau j$$

を満たすものとする。次の<sup>(2.7)</sup>両側剰余類集合を考える。

$$G_j \backslash G / G_{j\tau}, \quad (G_\tau)_j \backslash G_\tau / (G_\tau)_j$$

$$\alpha_j : G \longrightarrow G \quad (x \longrightarrow jx^{-1}x)$$

という写像を考えると、次のことが成り立つ。





$$G_j \backslash G / G_{\tau_j} \xrightarrow{\sim} (G_{\tau})_j \backslash G_{\tau} / (G_{\tau})_j$$

となり,

$$G_j \wr G_{\tau_j} \longleftrightarrow (G_{\tau})_j \times (G_{\tau})_j, \quad \begin{array}{l} g \in G \\ x \in G_{\tau} \end{array}$$

のとき

$$\frac{|G_j \wr G_{\tau_j}|}{|G_j| |G_{\tau_j}|} = \frac{|(G_{\tau})_j \times (G_{\tau})_j|}{|(G_{\tau})_j|^2}$$

となることもわかる。これらのごとを用いて、次のことが証明できる。

定理 Case (G'), Case (S') のとき,  $\mathcal{A}(G_j \backslash G / G_{\tau_j})$  は可換, 半単純で,  $G_j \backslash G / G_{\tau_j}$  上の球関数と  $(G_{\tau})_j \backslash G_{\tau} / (G_{\tau})_j$  上の球関数とは, 上の対応を通して同一視できる。

注意 Case (S') のとき,

$$(G_{\tau})_j \backslash G_{\tau} / (G_{\tau})_j = Sp_{2n}(\mathbb{F}_q) \backslash GL_{2n}(\mathbb{F}_q) / Sp_{2n}(\mathbb{F}_q)$$

上の球関数は, [7] で求められている。

### 文 献

- [1] G. Glauberman: Correspondences of characters for relatively prime operator groups, *Canad. J. Math.* 20 (1968), 1465 - 1488.
- [2] T. Shintani: Two remarks on irreducible characters

- of finite general linear groups, *J. Math. Soc. Japan* 28 (1976), 396 - 414.
- [3] T. Shintani : On irreducible unitary characters of a certain group extension of  $GL(2, \mathbb{C})$ , *J. Math. Soc. Japan* 29 (1977), 165 - 188.
- [4] T. Shintani : On liftings of holomorphic cusp forms, *Proc. Symp. Pure Math.* 33, Part 2, Providence (1979), 79 - 110.
- [5] H. Scito : Automorphic Forms and Algebraic Extensions of Number Fields, *Lecture Notes in Math.*, Kyoto Univ. 1975.
- [6] C.W. Curtis, I. Reiner : *Methods of Representation Theory*, Vol 1, Wiley-Interscience, 1981.
- [7] E. Banai, N. Kawanaka, S-Y. Song : The character table of the Hecke algebra  $\mathcal{H}(GL_{2n}(\mathbb{F}_q), Sp_{2n}(\mathbb{F}_q))$ , *J. Alg.* 129 (1990), 320 - 366.